

夜の果てに(1)

フリード・ランペ著
松川 弘*・訳

(平成24年9月27日受付)

Am Rande der Nacht (1)

von
Friedo Rampe

Aus dem Deutschen
von Hiroshi MATSUKAWA

(Received Sep. 27, 2012)

「あまたの運命が私の運命となりあい
人生はこもごもにそれらすべての運命を奏でている」
(フーゴー・フォン・ホフマンスタール)

ハンスは待つのが億劫になってきた。「ばかばかしい、やつらがすぐに来なかったら、もう帰るよ。目は凝らしすぎで、足はずっとひざまずきっぱなしで痛くて仕方がない。」
「もうすぐ来るよ、見てなよ」とエーリヒは言ったが、彼の声は自信なさそうに響いた。「まだもっと暗くなるよ。」
「ああ、もう何も見えないくらいに暗くなる。すると君は、やつらはあそこだ、と言うんだろう。が、それは実は何かの木の根なんだ。僕たちには分かっている。ばかばかしい。ほら吹きめ。」濠の真ん中に落ち着いて、首を誇らしげに立てて浮かんでいる二羽の白鳥をハンスは高慢げに眺めていた。彼らは、自分の巣を目指して進んでいた。ハンスは舌打ちをしたが、彼らは振り向きもせず、頭を微動だにしない。
「やつらは、昨日も来たんだ。うそじゃないよ」とエーリヒは言った。彼は、やっとハンスをあとと言わせるようなことを見つけたのだが、事がどうもうまく運ばないのだ。
「そうかい」とハンスは短く答え、相変わらず白鳥の方を見ていた。彼らは、濠に浮かんでいる巣にたどり着き、きれいな弧を描いてその回りを泳いでいた。

二人の少女は、もっと辛抱強くおとなしかった。彼女た

ちは、多分少し不安だったのだろう。もともとねずみは大嫌いだっただけ。ぞっとするような動物。この世でもっともいやらしい動物。あのつるつるした毛のないしっぽはどうか。いやだ、いやだ。人間目がけて、飛びかかりはしないだろうか？ 誰かが話してたっけ、あれが寝室にやって来て、寝ている人を…ブルル、もう考えないでおこう。帰りたい。でも、見たい気もする。少年たちは笑い、彼女たちをからかった。臆病者。違う、そうじゃない…。

フィフィは、ルイーゼに耳打ちした。「今からゆっくり三十数えるわ。それまでにねずみが来なかったら、すぐ帰りましょう。よくって？」ルイーゼはうなずいたが、フィフィの方ではなく、目を見開いて岸の斜面をじっと見つめていた。そこまでは水が着かず、少し泥濘になっていて、急な短い斜面には、褐色の土と垂れ下がった木の根が認められた。あそこには怪物たちが住んでいた。軟らかくて温かい泥濘。蟻蛙や赤虫。小魚たちが金褐色の水中を滑るように泳いでいる。かゆくもないのに、ルイーゼは、興奮のあまり自分のむき出しのひざを引っかいた。彼女は、腕で足を抱くようにしてしゃがみ込んでいた。靴はもう泥だらけだった。多分ストッキングやスカートも。彼女はまた座り込んだ…。

「あそこだ」とエーリヒは言って、下の方を指さした。「見えるだろう…」

「よかったね、たった今三十まで数え終ったところよ、ゆっくり…」

* 広島工業大学工学部電気システム工学科

「黙るんだ！ このばか。やつらを追い払うつもりか…」
もうあたりは薄暗かった。あまりはっきり見えなくなっていた。だが、何かが動いていた。木の根の下に、小さな灰色のものが。もうひとつ。さらにひとつ。三匹いる。彼らは近づいてきた。子供たちは、身じろぎもせず見つめていた。

「ああやってやつらは毎晩出てくるんだ。」これらのねずみが自分の発明物でもあるかのように、エーリヒは、突然、勝ち誇ったようにささやくと、ハンスの方を見た。

ハンスは真剣にうなずいた。「あのしっぽだけをじっと見るがいい」と彼は言った。彼らはしっぽを見た。指の長さほどの灰色で毛のないしっぽがびくびく動いていた。「腹ばいになるんだ」とハンスは強い調子でささやくように命令した。彼らはその命令に無言でしたが、頭をもたげて斜面をのぞき込んだ。

蛇に噛まれたようにとても苦しげに、ルーゼが耳をつんざくような叫び声をあげた。ねずみたちは、水に飛び込むと姿を消した。

「ばかやろう、逃げたじゃないか」とハンスは声を荒げた。

「大声で叫ぶなんて、いまいましい」とエーリヒは言った。

ルーゼは度を失って、泣きわめいた。「ねずみたちが、小さな目で、いやな目つきで私を見つめたのよ…。それから、唇を少しもたげて、歯をむき出して私に噛みつこうとしたの…」

「とっとと失せろ。女はこれだから困る。来いよ、エーリヒ！ 港に行こう。アデライーデ号がまだ停泊しているはずだ。確か君はまだ見たことがなかったね。泣き虫どもはほおっておこう。いやなやつらだ。もう、うんざりだ。」

エーリヒもまた、さげすむように下唇を突き出して、ズボンのポケットに手を突っ込みながらハンスに従った。

ルーゼは、もうほとんど泣いていなかった。「ねずみたちが、小さな目で、いやな目つきで私を見つめたのよ」と彼女は誰にもなく言った。

「まあ、いいじゃないの」と、フィフィが言った。「もう家に帰らなくちゃ。」

彼女たちは、あたりを見回した。太陽はもうとっくに沈み、今や濠の水は黒々していた。もう深みをのぞき見ることはできなくなっていた。それでも、水は、まだ金褐色の微光を放っていた。もやがかすかに水面からたちのぼり、あたりを覆っていた。濠端の木々はすでに黒い塊と化し、丘の上の風車が、青くくすんだ空に、茶色の羽根を、穏やかに警告するかのようにつき出していた。港通りから、街灯の小さな光がかすかに見える。それは急に輝き出したようだ。

上の道端のベンチに、ひとりの老人が腰かけ、杖を手で支えながらまっすぐ前を見ていた。フィフィがふらふらと無頓着に彼に駆け寄った。

「おじさん、今何時頃なの？」

「七時半だよ。」小さなボタンを押して金時計の蓋を跳ね上げてから、その老人は言った。パパの時計はこんなに分厚くないし、金製でもない。きっと銀製よ。フィフィはこう思った。「ありがとう」と、彼女は小声で言った。

「ちょっと待ちなさい。」老人はそう言うと、うつろな灰色の目で鋭く彼女を見つめた。「君たちは今しがた濠で何を探していたんだい？ 何が見たかったんだい？」

フィフィは黙って、微笑みながらうつむいた。

「ねずみを見たかったんだね。どうしてだ？ 言ってごらん。」フィフィは何も言わなかった。

「君たちがねずみを見ようとしていたのは分かっている。でも、あれをすてきだと思うのかい？」

「いいえ」とフィフィは目を上げずに答えた。

「やっぱりね」とその老人は言った。それから、彼は突然くすくす笑い出した。「君たち子供はいつも不快なものを見たがるんだ。ねずみ以外には何もいなかったのかい？」

「ええ、何も」とフィフィは言って、老人の方を見ずに、あわてて駆け出した。ルーゼは相変わらず同じ場所に立っていたが、今度は楽しげに見えた。

「もう七時半ね。早く帰りましょう。」

彼女たちは濠に沿って歩き、通りに出た。今や、街灯はこうこうと輝き、電灯もともっていた。一番線の電車が通りかかり、鉄道橋の下で停車した。

ヤコービ夫人が下車した。彼女は包みをいくつか抱えていた。フィフィとルーゼは懇懇に気取って挨拶した。「こんばんわ。まだ外にいたの。早く帰るんですよ。」彼女は優しく警告した。ああ、ママだったら別の口調で言うだろう。よその女の人はどうしてこんなに優しいんだろう。でも、やっぱりママの方がいい。いや、ヤコービ夫人は私のママのはずがない。ルーゼは欠伸をした。街角で彼女たちは別れた。別れ際に、ちょっと握手した。

ヤコービ夫人が乗ってきた一番線の電車は、港通りを走った。電車がとまった。ひとりの酔っぱらいがレストラン・ベルマンから出てきた。一瞬開いたドアから、オーケストリオンの音や哄笑が湧き出てきた。車掌はその酔っぱらいを引き留め、タラップから彼を力づくで押しつけた。「出てください…」

「おれは乗りたいんだ、料金を払えばいいだろう、無体なやつだ…」

「乗らないでください、いいですか？」発車のベルが鳴って、電車は動き出した。その男はとうとう置き去りにされ

た。「あの連中ときたら、電車中をゲロだらけにするんだ」と車掌はオスカルやアントーンに向かって言った。ふたりの学生は、真面目くさったわけ知りの表情でうなずいて賛意をあらわした。車掌は彼らの大きなスーツケースを見て、「ひょっとしたらアデライーデ号で？」とたずねた。

「ええ、ロッテルダムへ行くんです」とアントーンが答えた。

「九月に船で海を渡るなんてうらやましい」と車掌は言った。「そんなことがいつか出来ればなあ。」

「ええ、僕たちも楽しみにしてるんです」アントーンはそう言って、いささか後ろめたそうに外を眺めた。電車はちょうどアストリア館の前に通りかかった。窓口の女性がカーテンを開け、窓ガラスを半開きにしていた。

「あそこで今日ディークマンとアルバロスの好試合がある。ふたりとも名レスラーだ。知ってるでしょう。」

アントーンは、思い出そうとするかのように上を見た。「思い出せないなあ。」

「アデライーデ号では、マルテンス船長とも知り合いになれますよ」と車掌は言った。彼はひそかに少し微笑んだ。「いつも粹な給仕を従えています。」

「どういうことですか？」とオスカルがたずねた。

「すぐに分かりますよ。あの太っちょのネリーも、あなた方を楽しませてくれるでしょう。彼女はいつも赤いブラッシュの上に座ってますよ。」

「ネリーって誰です？」とアントーンがたずねた。

「これからみんなご自分で御覧になれますよ、お客さん。アデライーデ号では、退屈するなんてことはまずありません。」車掌はにやにやしながら車内に戻った。

「不愉快じゃないか？」とアントーンが言った。「あの船で一体何が起こるんだろう？」

「ほっておけよ、彼は自分がうらやましいので僕たちを不愉快にさせようとしただけだ。」

「この闇の中を出港するなんて残念な話だ。川の兩岸、河口、港口、こうしたものを僕たちはほとんど見れないんだから」とアントーンは言った。

「ああ、いまましいね。」

「でも結局は、闇の中にあるってことが、その魅力にもなっているんだがね。僕は今日はあまり眠れそうにないよ。」

「拝見しようじゃないか、大騒ぎするようなものは何もないと思うがね」とオスカルはゆっくりした口調で言った。

その老人は、相変わらず杖を手で支えながらベンチに腰かけていた。帽子がかたわらに置かれていた。彼は、穏やかだがうつろな眼差しであたりを見回していた。彼は、ただそこに座っていた。彼はともかく生きており、ベンチに

腰を下ろしてあちこち見回し、自分の周囲で起こったことを観察し、夜が近づいてくるのを見ていた。自分の背後に丘の上の風車、前には草地の斜面と濠、その向こうに鉄道線路の土手、そのうしろにオルベルス通りの低い家並み、たそがれにくすんで目立たなくなった白い壁といった構図の中に彼は座っていた。彼は、太陽が家並みの背後に姿を消すのを見た。乳母車をひいた子守女や遊ぶ子供たちは、この構図の中にはもう見えず、濠の水は黒くなり、空気はやわらかくすすけ、空は灰色がかった青だった。少しばかり前に、ひとりの少女が彼に時刻をたずね、すぐに走り去った。彼から逃げるようにして。確かに、すべてのものが、彼を座らせたまま去っていった。カールやベルタも彼のことをほとんど気にかけず、夜も彼のところにはめったに来なかった。彼はほとんど何もくれないので、彼らはむしろ映画を見にいった。

向こうの港通りでは、電車がガタガタうつろな音を立てながら通っていた。人々が店から出てきた。鉄道橋の下にあるソーセージの屋台には、労働者たちが群がっていた。彼らは、赤くて太い胡椒の効いたソーセージを注文し、それが自分のところに飛んでくるのを笑って待っていた。飼い主のいない犬が一匹、頭を起こし前方を嗅ぎながら彼のそばを駆け過ぎた。犬は自分が向かう方向を知っていた。みんな家に帰るのだ。だが、家で何をすればいいんだ？寝る時間が来るまで、暗い部屋の中に座って、通りを見下ろしていればいいのか？寝ることも出来ないのだろうか？もうしばらくここにいたい。もうしばらくここに座って、待っていたい。しかし、何もやっては来ない。何も来ないのは困る。だが、恐らく誰かがやって来るだろう。あの若者がやって来て、二言三言彼と話せるだろう。彼はあそこの後ろにいるんじゃないか？いや、彼はいない。白鳥たちだ。彼らは泳ぎ回り、体を押しつけ合い、首を愛撫するようにこすりつけ合い、自然の営みを始めている。その行為をやめると、彼らはふたたび離れ、自分の巣のまわりをゆるやかに円を描いて泳ぎ、もう何もしない。彼らは、巣をめざして進み、小さな木片の上にぎごちなくよじ登り、体を横にすると、もう一度、どろっとしたタールのような水面の上に目をやり、首を羽根の中に突っ込んだ。眠りたいのだ。彼らは一晩中こうして野外にとどまっていられる。しかし、こっちはもう帰らなければならない。8時の電車が着くのを待とう。あの若者は来るだろうか？

もうしばらくかかるだろう。まだ彼は、コートポケットに手を入れたまま、かなり急ぎ足で落ち着きなく通りを歩いている。彼は体中に刺すような痛みを感じている。そして彼の目は湿った輝きを帯びている。彼はいつも同じ道

を通る。毎日、通りを抜けて土手を越え、川の方に向かう。それから、川のたもとに立って夕日に赤く染まったり、夜は真っ黒な川の流れを見下ろす。川の水は橋脚に当たって音を立て、彼に訳の分からぬことを耳打ちする。彼は構図の中に駆け込むと、いつも同じベンチに腰をおろしている老人と二言三言会話を交わす。老人はとても退屈しており、彼をちょっと放免しそうにない。若者は、老人が日中しゃべることのできる唯一の人間なのだろうか？ 彼がやって来るとき、その老人は自分の喜びをほとんど隠すことができない。だが、ペーターは、今日は彼の希望のない空しい無駄話を聞きたくない。彼はそもそも、あの老人と話をしたくないのだ。ふだんは誰も連れていないので、自分も彼としか話をしていないわけだ。今日はそばを通り過ぎるだけにしておこう。慇懃に挨拶して通り過ぎればいい。

車がひっきりなしに行き交う通りからそれて、彼は「航海」館の方に曲がった。船長たちの未亡人が住むこの養老院の広い中庭を通るのが彼は好きだった。そこは素敵に静かで人気なかった。彼女たちの安らぎの深さが瞬時に感じとれた。いくつかの部屋では、老女たちがもうランプの下で夕食をとっていた。窓は開け放たれていたが、物音はしなかった。ただ、深皿やスプーン、フォークの触れ合う音がかすかに聞こえるばかりだった。暗い隅の方で、一羽の高慢なオウムが鋭い声で叫んだ。「ちっちゃなローラ、可愛いちっちゃなローラ…」数人の老女が、まだ明かりもつけず、虚脱したように黙然と身じろぎもせず窓際にすわっていた。二つの黒い腰をかがめた人影が館の壁に沿ってゆっくり移動し、別の二つの人影が小さな前庭の前でささやき合い、忍び笑いを交わしていた。彼女たちのあごひも付きの帽子が鶏冠のように揺れていた。ちっぽけな暗緑色の芝生の真ん中の水盤まで茂みに囲まれた小さな噴水がかすかに音を立てていた。ここは静かで、人気がない。彼女たちはもう生きていないのだ。子供たちは去り、夫たちはおそらく海の底に眠っている。だが、彼女たちは港の中にいるのだ。彼女たちが飼っているオウムは、まだ夫とともに暮らしていた時分に連れてきたものだった。彼女たちのたんすの上には、小さな貝殻や珊瑚細工が置かれている。このように、彼女たちはただ何となく生きているのだ。

それから彼はふたたび外に出て建物の中に入り、そこを通り抜けて、足の向くままに、港通りへ、川の方へ向かった。だが、遠くからあの老人の姿が見えた。彼はいつものようにベンチに腰かけていた。身じろぎもせず、杖を手で支えながら。帽子がかたわらに置かれていた。彼は絶えずペーターの方に目をやっていた。ペーターが会釈して足早に通り過ぎようとしたとき、老人は呼びかけた。「ちょっと付き合ってくれ。わしはずっと前からあんたが来るのを

待っていたんだ。」

ペーターは腰をおろした。「見てごらん。土手の上で子供たちが水の中をのぞき込んでいるだろう。何をみていると思う？ ねずみさ！ 子供ときたら何を思いつくことやら。あれがやつらにはおもしろいのさ。」

「ねずみだって？ 馬鹿らしい！」ペーターは生返事をした。

彼は濠の上を見た。濠がカーブしているところに、何か黒いものが姿をあらわした。それはボートに乗ったひとりの男で、彼は、落ちついたオールさばきでかすかな水音をたてながらボートをゆっくり漕いでいた。黒いタールを塗った幅のあるボートだった。オール受けがきしんだ。その男は、大きな先のとがった麦わら帽をかぶっていた。

「あれは誰だい？」

「あの施設管理人を知らないのか？ 週に一度、やつは濠にやって来て、万事異常がないかどうか確認しているんだ。あひるや白鳥の巣をのぞき込んでね。住居はあの向こうだ。」彼は肩越しに親指で方向を示した。

「水車小屋に？ 彼は粉屋なのか？」

「あの水車はもう動いていないのを、知らないのか？ 10年前からとまったままだ。飾り物というか、舞台装置みたいなものさ。今は管理人の住居になっている。おもしろいやつでね。やつのことならわしは逐一物語るができる。」

だが、ペーターはその話をもう聞きたくなかった。彼はこの果てしない物語を知っていた。「すまないが、もう行かなければ。予定があるんだよ。」

「予定があるって？ どんな予定か聞いていいかね？」

「たいしたことじゃないよ。」

「たいしたことじゃないって？ ちゃんと分かってるよ。何かをやらかすんだらう。もう聞かないことにしよう。わしにも若い時代はあった。大昔の話だがね。」老人は含み笑いをした。「成功を祈ってるよ。」

ペーターは気を悪くした。「あんたは誤解している。本当だ。僕は、ただ映画を見にいくだけだ。あんたが考えているようなことはしないよ。」

「それじゃ、何も恥ずかしがることはないじゃないか。男同士だらう。映画もまたなかなかのものだ。その気にさせてくれるから。うまくいくといいが。まあ、成功を祈るよ。」

ペーターは我慢できずに急いでその場を立ち去った。あの老人のそばにすわるのも今日が最後だ。彼は濠に沿って港通りまで歩いた。鉄道橋のところに出て、ソーセージの屋台のそばを通りかかったとき、橋の上を八時の列車が通過した。列車は、土手の上を通り過ぎると、灯光にぼんやり照らされたオルベルス通りの家並みの正面にさしかかっ

た。列車の明かりが細長い筋になって濠の水面に落ちた。老人にとって、それが腰をあげる合図だった。ゆっくりと、ためらいがちに彼は家に向かった。なおしばらく、彼は施設管理人の方を見やって立ちどまっていた。彼のボートが白鳥の巣に近づくと、白鳥があらわれた。頭を羽根から出し、首を管理人の方に伸ばして、白鳥は大きな羽根をゆったりと羽ばたかせた。白鳥が頭を管理人の手の上に置き、管理人がその頭を軽くなでるのを老人は見た。もういくら何でも老人は帰らねばならなかった。堅い椅子が置かれ壁には無言の故人たちの肖像画がかかった自室が彼には怖かった。ひょっとしたらカールとベルタがもう一度回ってくるかも知れない。そうすれば彼らと少し話もできるだろう。帰宅したらもう彼らが来ているかも知れない。彼が帰宅していないので、もう立ち去ったあともかも知れない。彼の足取りは、急に早まった。

しかし、彼は別に急ぐ必要はなかった。彼らは部屋の中にすわって彼の帰りを待ってはいなかった。彼らは今日もやって来なかったのだ。彼はまた一人で夜を過ごすしかなかった。カールとベルタは、そもそもこの町にはいなかった。カールは午後が休みだったので、彼らは汽船で川を下って行ったのだ。彼らは今ごろは帰途についている時分だった。ベルタは、自分の父親のことを考えなかったし、イチゴのボウルと昼間の太陽の強い日差しとで頭をもうろうとさせながらうしろの甲板でテーブルについている夫のことさえ思わなかった。彼は目を閉じ、かすかないびきをかいていた。

彼女は、自分が一緒に踊っている男の存在しか感じなかった。彼は船の航海士だった。彼は午後の間ずっと彼女の行動を目で追っており、今は彼女とだけ踊っていた。彼女は頭をうしろにもたせかけていて、口が少し開き、その短くカットされた髪は生温かい夕べの風になびいていた。彼女は熱っぽく誘惑するように彼を見つめていた。日に焼けて引き締まった顔、明るく青い目、彼女をくり返し締めつける堅い筋肉が、彼女を夢中にしていた。

「私、もうほろ酔い」と彼女は言った。「食事の時にイチゴを食べ過ぎたの。」

「それはいけない」と、彼は笑いながら言った。「あのイチゴにはアルコールがしみ込んでいるからね。」

「分かってたけど、とても美味しかったのよ。とても眠いわ。」

船上バンドがタンゴを演奏していた。幾組かのカップルが絶えず回転しながらテントの下やテーブルの間で踊っていた。船はゆっくり岸すれすれに航行していた。草原には家畜の黒い影が見られ、浜辺ではまだはしゃぎながら水浴びする人たちがいた。ヨットが、何隻かゆっくり通り過ぎ

ていった。

「一緒に来てくれ」と航海士は言って、彼女の腕をとった。

彼らは階段を下りていった。「おっと、つまずくなよ、一歩一歩慎重に。」

彼らは廊下を通った。

彼はドアを開けた。「僕の船室だ。」

「いやよ、入らないわ。」ベルタは突然、不安に襲われた。彼は彼女を引っ張り込もうとしたが、彼女は抵抗し、ドアの枠にしがみついた。それから彼女は屈服した。汽船は進み続けた。船は、百姓家、船のドック、工場のそばを通り過ぎた。バンドは演奏を続け、水平線には町の灯光が認められた。

彼らはしばらく一人の酔っ払いを眺めていた。彼は市電に乗ろうとしていたが、車掌は彼を中に入れまいとしていた。彼は悪態をつきながら通りの真ん中に立ち、電車をうしろから威嚇した。ハンスは彼の言葉を聞き取ろうと、すぐそばまで近寄った。彼は通りをふらふら歩き始め、通行人に自分の怒りをぶちまけた。誰も彼の言うことを聞いてはいなかったが、ハンスだけは彼のおしゃべりに真面目に相づちを打っていた。その酔っ払いは、相変わらず車掌をののしっていた。小さなハンスは、おもしろそうに下から彼の度を失った真っ赤な顔と据わった目を見た。彼はうれしさのあまりエーリヒの脇腹をつねった。それからハンスは、港の税関の前に停めてあるアーク灯の光の中で暗青色に輝く美しい車をのぞき込んだ。黄色のコートををはおった一人の上品な紳士が、税関の中に入っていった。そして、きらきら輝くエナメル塗りのゲートルを巻いた緑の制服の運転手が、赤煉瓦の壁の前を行ったり来たりしていた。ハンスは下の方から、前に小さな銀色のワシのついた車の中をのぞき、ドアをはねあげて警笛を押し、小さく鳴らした。すると、運転手は高飛車に言った。「もういい加減にしないか。」

また彼らは走り出した。開いた居酒屋のドアから、タバコの煙や小さなテーブルについた男たち、カウンター、ビールのコップ、電気ピアノが垣間見えた。彼らはタバコ屋の飾り棚を眺めた。チョコレートみたいに真っ黒で巨大な葉巻、タバコの葉、パイプ、彩色された石膏のインディアン像。葉巻ケースの内側には、熱帯の風景が小さく描かれていた。

タバコの葉の収穫風景が派手な色彩で描かれた小さな絵を眺めるのにハンスが夢中になっているとき、エーリヒは急にふり返って、通りの真ん中で腕を激しく動かして交通整理をしている保安警察官を見た。税関からあの黄色のコートををはおった上品な紳士が税関吏と一緒に出てきた

が、税関吏の方は渋りながら勿体ぶって紳士を見送っていた。自動車や市電が、船員や沖仲仕たちが通り過ぎていった。辺りはもうほとんど真っ暗で、濃紺の空はうっとうしく、アーケ灯の白い光が通りの保安警察官や赤くくすんだ税関の壁の上を流れ、その向こうの芝生や茂み、鉄道の盛り土の傾斜に生えた木々に滲み出していた。夜も遅くなり、遠くで汽船の警笛が聞こえた。彼らの頭上に標準時計がかけてあり、八時一五分を指していた。

エーリヒは急いでハンスを引き寄せた。「もう遅いから家に帰ろうよ。」彼は上方のくすんだ光を放つ大きな文字盤を指し示した。

「家に帰る？ 今から？ とんでもない。アデライーデ号はどうするんだ？」

「明日も見れると思うよ。」

「おい、出港は今晚なんだよ。それに、今度いつ来れるか分からないじゃないか。」

ハンスは、半ばさげすむように、半ば元気づけるようにエーリヒを見つめた。エーリヒは逆らうことができなかった。このハンスの生意気で高慢な面構えに、彼はどうしても逆らえなかった。彼らはさらに足早に走った。だが、正面が明々と照らされているアストリア館の前で、彼らはもう一度立ち止まらねばならなかった。壁中に同じポスターが張られていた。二人のレスラー、ディークマンとアルパロスが格闘している。彼らは、上半身を前にかがめ、相手を威嚇するように頭を突き出して向かい合っている。彼らの体はばら色に染まり、巨大な筋肉が盛り上がっている。彼らはけばけばしい赤と青のパンツをつけている。ハンスは、長い間じっとこの二人の姿を見つめていた。浮ついた気分が消え失せ、深い敬意が心にきざしてきた。エーリヒはひどくふさぎ込んでいた。今ここに立っている彼らは、これからどんどん先に走り、家からますます遠ざかっていくことになる。見知らぬ人々が、アストリア館の切符売り場に殺到していた。外は、海に、外国に向かう船が停泊する港だ。彼は深い孤独を感じていた。こうしている間にも、父と母は夕食をとっているに違いない。油で炒めた彼のジャガイモ、彼の目玉焼きはきっと冷たくなっているだろう。母は皿に蓋をしてくれているだろう。彼も同じ食卓につくことができたのだが。だが、彼は今ここであちこちさまよい歩かねばならない。そうするより他仕方がないのだ。ハンスを、このたったひとりの友を、みんながうらやましがるこの最良の友をなくしてもいいのか？ それはとてもできない。彼は友のほっそりしたむき出しの首を腕で優しく抱いた。

「馬鹿な真似はよせよ。女の子のような真似はやめろ。」ハンスの血の気の無い顔にさげすみの色が浮かび、彼の灰色の目は鋭さを増した。鼻の付け根の上に小さな深いしわ

が幾つも走り、秀でた額に刻み込まれた。

「ちゃんとしろよ。」ハンスは急に暗く狭い横丁にそれた。彼はしばらく進むと、壁の隅に突っ立った。街灯のやわらかな光が辺りをほのかに明るくしていた。エーリヒは、ひとりの男が近づいてくるのを見た。彼は口笛を吹いた。するとハンスはあざけるように急に笑い出した。男は立ち止まり、ハンスを諭そうとした。だがそのとき、彼はライバルの存在に気づいた。高慢にかん高い声で叫ぶと彼は立ち去った。

「ここで立ち小便してはいけないんだって」と、ハンスは、首を振りながらエーリヒに向かって言った。「それがどうだというんだ。そんなことがこの僕に言えるのかい？」

もちろんエーリヒにはできなかった。ハンスの行為は正しく、そして勇敢だった。

彼らは港の入口に着いた。遠くの方に、波止場の向こうの港の奥に、船の煙突やマストがそびえ立っていた。

「あれがアデライーデ号だ。きれいに照らし出されている。」

ヤコービ夫人は暗い階段を昇っていった。彼女は足許に気を配っていた。彼女の荷物は手すりに当たって音を立てた。もう一度行ってみよう、と彼女は考えた。自分の関心を何度も示すのが、彼女の楽しみでもあった。私はとても気を使っているんだ。彼女は、マーラーの部屋の呼び鈴を鳴らした。ドアが開くと、マーラー夫人が狭い玄関口の闇の中に立っていた。彼女の青白い顔だけがくすんだ微光を浴びて少しだけ浮き出していた。

「ねえ、あなた、どんな具合なの？」

マーラー夫人はしばらく沈黙し、それから少しすすり泣いた。

「どうぞお入りになって。」

「いいえ、ちょっと聞いてみただけよ。これから、ベルクさんの夕食の支度をしなくちゃならないの。」彼女は包みを揺すった。「これがあの人の食事よ。」

「もうだめよ。あの人は死んだも同然です。」

「何てことを。まさかそんなこと。」

「私にはよく分からないけれど。彼は本当に死んでるのよ。お医者さまも不思議そうにのぞき込んでらした。彼はおとなしくて、一言もしゃべらない。どうすればいいの？ お先真っ暗よ。」

「かわいそうに、元気を出して。望みを捨てないで。分かるもんですか。私はもちろんいつでもあなたのお役に立つつもりよ。ベルクさんが夕食をとったら、もう一度寄りますわ。」

「あの人はまだフルートを吹くのよ。」と、マーラー夫人はつらそうに言った。

「何ですって？ 本当なの？ だったら、私はいますぐにでも…」

ヤコービ夫人は早口でまくし立てたが、マーラー夫人は安心してたどるはずだけで、耳を傾けもせず、奥に引込んだ。まるで霊安室に入るように。

「また寄るわね。」ヤコービ夫人は自分の住居に昇って行った。マーラー氏の寝室は、彼女自身の寝室の真下にあった。今晚はおそらく彼女は死者の頭上で眠ることになるだろう。あまりいい気持ちではないが、仕方がない。多分、大がかりな葬儀にはなるまい。彼はもう十年も年金暮らしなのだから。あの老人が姿を消しても、鶏が鳴くわけじゃなし。新聞にそれ相応の小さな死亡広告が出て、対の花輪が来るだろう。牧師さんが話しすぎて声をからすってこともまずあるまい。喪服はあったかな？ 青い服でいいや。それに茶色の帽子と。羽飾りははずして、黒いリボン巻けばいい。それから、黒い手袋はまだあったな。別に黒づくめにする必要はない。身内じゃないんだから。よし、今度はベルクだ。もちろんあの人には言ってやらなきゃ。なるだけ穏やかに、でもきっぱりと。確かに気持ちのいい間借り人だけど、それとこれとは話が別だ。彼は折り目正しい人だし、分かってくれるだろう…。それがあの老人にはどんなによくないことか、あの人は知らないんだ。

彼女がドアの鍵を開けると、すぐに長く引いた澄んだ音が聞こえてきた。彼女は包みを脇に置くと、コートを脱いでノックした。ベルクは、彼女が入ってきてても別に迷惑がらなかった。彼は、彼女の方を見ずに、「ちょっと待って」と言った。彼は開いた窓の前に立っていたが、窓の下は庭で、上は家の裏壁だった。紙が置かれた楽譜台を前にして、こんな夜遅くまでのんびりフルートを吹いていたのだ。この暗さでは、もう何も見えないだろう。彼はおそらく暗譜で吹いていたのだ。「いつもの彼とは違う。」彼の真剣な不動の顔つきを見たとき、ヤコービ夫人は突然そう感じた。黒い垂れ毛が、彼の白い反った額にかかっていた。恐ろしく細長い首が、開いたワイシャツのカラーから突き出していた。旋律が終わり、ベルクは、銀で飾った黒いフルートを下ろし、奇妙に冷たい眼差しでヤコービ夫人を見つめた。薄くて幅の広い口とやせこけた頬のまわりに浮かんだ弱々しい微笑みも、ヤコービ夫人には無気味だった。

「何です？」

「これから夕食の支度をします。」

「どうぞ。」

「それから、下の部屋のご主人が病気であることはご存知でしょう。実は、もうすぐご臨終なんですよ。」

ベルク氏は、落ち着いて窓から下の庭を見下ろしていた。生暖かい軟風が、九月の木々の緑の葉を一杯つけた梢をひっかき回していた。

「お気の毒に」彼は、骨張った狭い肩をすくめた。

「あなたにそのことをちょっと言っておきたかったんです。」ヤコービ夫人は、びくびくしながらささやいた。この人は自分の手には負えない。彼女は姿を消した。

そして彼女が台所に立ったとき、またしてもフルートの調べが、長く引いた澄んだ音が、穏やかに、荘重に、厳粛に響きはじめた。

ヤコービ夫人はもう一度部屋に入った。今度は、ベルクが吹き終るのをじっと待つようなことはしなかった。彼女は、憤懣を抑えながら演奏をさえぎった。

「ベルクさん、下の部屋に死にかけの病人が寝てるんですよ。」ベルクは演奏を続けた。「それで？」

「フルートを吹くなんて場違いだってことがお分かりにならないんですか？」

「私はバッハを吹いてるんです。」ベルクは穏やかに、表情を変えずに言った。彼の細長いやせた指がゆっくりフルートの穴のうえを上下した。彼の眼差しは、庭や家々を越えて、夜を迎えた戸外に向けられていた。

「バッハねえ。でも、この瞬間にも…。あなたは何も感じないんですか？ 私は、あなたのことをずっとすてきな人だ、私よりすぐれた人間だって思っていたんです。それなのに？」ヤコービ夫人は、どうしてこんなことを突然言う気になったのか、自分でも分からなかった。

ベルクはようやくフルートを下ろすと、奇妙な表情で彼女にふたたび微笑みかけた。ヤコービ夫人は、彼の青ざめた彫りの深い長い顔の美しさに肝をつぶした。彼女は、この澄んだ刺すような灰色の眼差しにもはや耐え切れず、脇を向いた。

「バッハはいつでも吹けるし、いつでも吹くべきです。」彼は、とても反駁できないほどの確信を込めて言った。「これは人の生死とは無関係です。」

「私には理解できません、頭が悪すぎるものですから。」

「ごく簡単なことです。」と、ベルク氏は言った。

ヤコービ夫人にはそれが本当に不気味で奇妙なことに思われた。「演奏を続けても構いません。もう私は何も言いませんから。私は善意だけが取り柄の馬鹿な女なんです。」と、彼女は頭を振りながらふさぎ込んで言うと、部屋から出て行った。彼女がベルク氏の夕食の支度をしている間、理解しがたい澄んだフルートの音色が、たしなめるように彼女の方に押し寄せてきた。別の間借り人に入ってもらい算段をしなくては、と彼女は考えた。

ベルク氏はフルートを吹き続けた。彼は一晩中吹いていた。彼はいつもそうしていたし、今日もまたそうした。銀色に輝く冷たい音色が、澄んだ穏やかな音程で庭の上をただよい、夕方の空気と混ざり合ってそこに溶け込んだ。だが、この調べを聞いている者、室内でこれに耳を傾けてい

る者、この強いメッセージ、澄んだ響きを理解できる者はいたのだろうか？ 死の床にある病人は、もうこの音色を聞き取ることはできなかった。彼はすでにあまりにも深い眠りに落ちていたのだ。そうでなければ、彼はおそらくこの音色をもっともよく理解できたに違いない。他の人々には、それはたいして聞き取れなかった。だが、寝間着姿で開いた窓辺にもたれている小さなルイーゼには、この響きが理解できた。彼女にはこの音色はとても美しく、まったく分かりやすいものだった。彼女は頬杖をつき、夢見心地で庭をぼんやり眺めていた。調べは緩やかな軌道を描き、夕べの軟風が庭の木々をわずかにそよがせ、草花や木の葉のにおいを運んできた。庭は暗緑色になり、樹木のかたまりや茂み、黒い板塀、芝生、子供用の鉄棒などが、所々にぼんやりと浮かんでいた。上の家々の各部屋には灯がともり、人々が無言で行き来していた。遠くの方から、ラジオの音楽がフルートの歌を伴奏するように鳴り響いてきた。ルイーゼは、隣の運送屋のすえたようなきつい厩舎のにおいを嗅ぎ取った。かじ棒を吊った馬車が中庭にとめてあり、厩舎では馬が幾度となく鼻を鳴らし、蹄を打ちつけていた。馬丁がランプを掲げて中庭を横切り、あちこちを照らすと、厩舎の中に入った。しばらくの間、土色の干し草の山や馬具のかかった板壁、輝く馬の太い胴体が姿をあらわした。それからふたたびすべてが、柔らかくうねり流れる夜の中に沈んだ。ルイーゼの心は、銀色の軌道を描く調べに乗ってまた浮遊していった。そのとき、彼女は突然驚いて飛び上がった。また、ねずみがいたのだ。小さな邪悪な目、鋭くとがった鼻先、灰色の口がいやらしく開いて、耳障りな音を立てる恐ろしい歯が見えた。ルイーゼは急に、夜にたいして、一人でいることにたいして不安を抱いた。彼女は母親を、閉め切った部屋を、居心地のよさを恋しく思った。急いで隣の庭を見ると、そこには、彼女を慰め、落ち着かせてくれる平和な構図があった。

庭の隅の、大きな木づたの絡みついたあずまやに、地理の教師であるヘニッケ氏が二人の息子と一緒に腰を下ろしていた。石油ランプがひとつ、テーブルの真ん中に置いてあって、暖かな黄色い光を放っていた。そのランプがときおり煙を上げるのでヘニッケ氏は注意深く芯を絞った。彼の前には開いた本が置かれていて、彼はそれを朗読していた。彼の二人の息子、ひよろひよろしたにきび面で金髪のギムナジウム最上級生たちは、頬杖をついて彼の言葉におとなしく耳を傾けていた。彼らの眼差しは、暗い庭の中に、あるいはさらに遠方に向けられていた。ヘニッケ氏は眼鏡をかけており、そのしわのないばら色の童顔は輝いていた。彼の灰色の髪には銀色の鈍い輝きが認められた。ヘニッケ氏は、遠い国々、旅行、冒険、海、船を愛していたが、一度も故郷の町を離れたことがなかった。憧れから、

彼は地理の教師になったのだ。旅行できないので、彼は本を読み、空想旅行を楽しんでいた。その方がむしろ彼の心にならっていた。すべてがごくスムーズに進行した。夕方、彼は息子たちに本を読んで聞かせたが、昼の間はときどき港にたたずみ、船を眺めていた。彼は港に出入りする船をすべて知っていた。彼はいつでも自由に港に出入りすることができた。彼は一般の人々がふつう立ち入らないようなところでも行くことができた。それは、彼の友人が税関吏をしていたからだ。その税関吏は彼に同情し、立入りを認めてくれたのだ。そんなわけで、ヘニッケ氏はときどき柵板や綿玉の上にすわって頬杖をつき、たばこを吸い、港の雑踏を凝視していた。港のすべての人々が彼のことを知っていた。

ヘニッケ氏は読書を中断し、しばらく物思いにふけた。「今晚の十一時半にアデライーデ号が出港する」と、彼は小声で言った。息子たちはうなづき、ヘニッケ氏は出港するアデライーデ号を少しの間目で追っていた。ベルク氏のフルートの調べが、軽く心地よく彼の回りを流れていった。それは彼には銀色の水の軌道のように思われた。

それから彼は読み続けた。「われわれが二度目に浜にやって来たとき、海岸はまったく異なる様相を見せていた。こうした風景が、嵐のとき、北国でよく見られる、雲がむくむくと群がり霧が出る暗い雨降りの日にではなく、晴れの日にだけあらわれることに、われわれは気づいていた。海はごくおだやかで、薄青く透明だった。岸辺にほんのわずかさざなみが打ち寄せていた。水晶のように透明な潮を通して、小さなばら色の貝殻や蟹、漂い過ぎるクラゲの驚くほど薄いヴェールのような姿が見えた。私の友人マヨは、今はもうすっかり人懐っこくなり、白い歯をむき出して魅力的に笑いかけてきた。彼は投槍をふるい、信じられないほどの確実さで通り過ぎる巨大な魚を仕留めていた。彼のつややかな茶色の体はほとんどギリシア人のように美しかった。表現力に富んだ身振り言葉で、彼が私に理解させようとしたのは…」砂利をきしませて誰かが歩いてきた。ヘニッケ氏は目を上げた。税関吏がぎごちなくもったいぶって近づいてきた。人形と遊んでいる現場を押えられた少年のように頬を紅潮させて、ヘニッケ氏は急いで本を閉じた。「今日はここまでだ。」彼はわざと陽気に叫んだ。「君たち、ちょっと席をはずしてくれ。」息子たちはしばらく手足を投げ出していたが、大あくびをすると立ち上がり、疲れて夢見心地ののろのろした動作で姿を消した。

税関吏は、その本を見ると、みじかく嘲のような笑い声を立てた。「また性懲りもなく頭にくだらないものを詰め込んでるな？ 君はまさしく教育者だよ。彼らを定刻に目覚めさせ、生存競争のために鍛えるかわりに…。まあ、いいさ。それもよからう。だが、無意味じゃないか。」彼はうん

ざりしたように頭を揺すり、眼鏡越しに不機嫌そうに友人を見つめた。ヘニッケ氏はあいかわらず軽く頬を紅潮させて、燃えるランプの芯を見つめていた。炎がまた大きくなったので、彼は、何かすることがあるのを楽しむかのように芯を絞った。ベルク氏のフルートの澄んだ調べが哀しげに流れすぎていった。

税関吏はヘニッケ氏を何も知らない子供扱いしていた。彼の方はこの世の中を知っていた。二十五年間税関に勤めている彼は、ものごとを十分わきまえていた。密輸の摘発については絶対の自信をもっていた。彼はそのコツを心得ていた。彼の目は何ひとつ見逃さなかった。おそらく目があまりに鋭くなりすぎたので、彼にはたいていのものはよく見えたが、かえって見えなくなったものもいくつかあった。子供向けの本や他愛のないお伽話ばかり読んでいるという理由で、彼はヘニッケ氏のことを少しばかり軽蔑していたのではないのか？ いや、むしろ彼はヘニッケ氏を愛し気の毒に思っていたのだ。いつの日にか彼がことの真相を悟り、目を見開いてくれたなら…。そんなことは起こりえない！

ヘニッケ氏は頭を上げてフルートの調べに耳を傾けていた。彼は曲の拍子に合わせて体を揺すっていた。

税関吏もまた耳を傾けていた。彼にはフルートの響きがとて美しく思えた。彼は音楽好きだった。にもかかわらず、彼はこう言っただけだった。「あの男はフルート狂だね。彼は自分の演奏に酔っている。君は彼を許しているのかい？」

「どういうことかね？」と、ヘニッケ氏はぼんやりたずねた。

だが、税関吏はもう緑色の制服の首のボタンをはずしていた。「すわるときついでね。ご覧の通りさ。」

「古くからの友達じゃないか」と、ヘニッケ氏は言った。

税関吏はまた嘲笑した。「ああ、彼らはもちろん大きなびかびかの車をもっているし、お抱えの運転手もいる。黄色い上等な防水コートももっている。だが、よくよく見ると…。」

ヘニッケ氏は、手を税関吏の腕の上に置いた。「もうやめろよ。思い出したくもない。」

「ああ、もうやめよう。恥の上塗りだからね。」税関吏はつぶやいた。彼は本当はまだ愚痴を言いたかったのだが、実際にはもうできなかった。二人の友達は微笑しながら見つめ合った。ベルク氏のフルートの澄んだ音色が響いてきた。税関吏は体を伸ばし、ゆったりとベンチにもたれかかった。彼の制服の前がはだけて、白いシャツが見えた。金色の肩章がきらりと光った。「ここでやっと人心地がつけたよ。」

あずまのランプのもとで、彼らは無言のままのんびり座り、安らぎと音楽を楽しんでいた。

そのとき、突然、フルートの演奏が、次第に盛り上がる旋律の真ん中で中断された。

「演奏の真っ最中にやめるなんて、馬鹿な奴だな。」と、税関吏が残念そうに言った。「折角盛り上がってきたというのに。」

ヤコービ夫人が電灯のスイッチを入れたのだ。ベルク氏はもう吹く気がなくなった。彼はソファに腰を下ろし、かすかに微笑みながら、ヤコービ夫人が夕食の用意をするのを眺めていた。そんなとき、いつもの彼女なら、こう言うのが常だった。「今度はちゃんと食べてくださいよ。こんなにすてきな料理をこしらえてあげても、私はいつだってほとんどそのまま運び出さなくちゃならないんですから。箸をつけるのはいつもほんの少しだけ。もっと鳥みたいに食べて下さいよ。」だが、今日は彼女は何も言わなかった。ただ、支度がすんだとき、一瞬とがめるように彼を見つめただけだった。彼の白いシャツの襟が大きくはだけて、青白骨張った胸が見えた。彼女は、彼の胸元に小さなかげりを認めていた。「しっかり食べてくださいよ」と、彼女は早口で言うに出て行った。彼ももう長くはないことを、彼女は突然悟った。彼も死ぬ運命にあるのだ。それでいてまだあんなにのんびりフルートを吹いている。自室に戻ったとき、彼女の目にはまだ彼のあのかすかな微笑みが焼きついていた。